

with コロナの「今できる地域貢献活動」

古都 昌子 (Masako FURUICHI)

田中 美菜江 (Minae TANAKA)

松本 弘美 (Hiromi MATSUMOTO)

福永 まゆみ (Mayumi FUKUNAGA)

鳥取看護大学 看護学部看護学科

はじめに

鳥取看護大学は、地域とともに歩む大学として、令和3年に7年目の春を迎えようとしている。「地域に向き合い、寄り添い、地域とともに歩む大学」として、開学時から担当された方々の甚大なる努力により展開されてきた地域貢献活動は、地域で種を撒き、芽は膨らみ、地域との関係形成の中で花が咲くフェイズを迎えていたように考える。

令和元年度、「まちの保健室」は、倉吉市全13地区公民館での「まちの保健室」に加えて、鳥取県中部にとどまらず、全県下で繰り広げられている。年間回数68回参加者数1,570名にもものぼる「まちの保健室」は、まさに鳥取看護大学における地域貢献活動の代名詞である。開学以来、学術機関として、「まちの保健室」に関する研究が取り組まれ^{1) 2)}、地域の健康ニーズについて、データからその声を聴こうとする取り組みが諸々進められていた。また、地域の健康づくりリーダーの人材育成事業「まめんなかえ師範塾」を修了した「まめんなかえ師範」（以後、まめんなかえ師範とする）128名を輩出し、参加住民、まめんなかえ師範、学生、教職員の力を結集して「まちの保健室」は繰り広げられ、その効果も検証されてきた^{3) 4)}。教育・研究との連動性や地域ニーズに対応するバランス感覚を持ちながら、質的充実の第2ステージに向けて歩みを進めていたといえる。

しかし、令和初頭の時代を襲った世界規模の新型コロナウイルスの感染は、世界中を新型コロナの渦に巻き込んでいき、あっという間に私たちの生活を一変させた。経済か、感染予防かと施策の動きも伴い、感染から守るための生活上の制約に様々な痛みを抱えながらの1年間であったと振り返る。

本稿では、令和2年度初頭4月7日に発出された緊急事態宣言後、制約の中にあつた地域貢献活動について、何を感じ、考えながら、どのように取り組んできたのかを振り返る。地域貢献委員会のメンバーとともに「今できる地域貢献活動」として「with コロナ」の地域貢献を目指した活動の軌跡をたどり、「with コロナ」における地域貢献活動の未来への一端を描いていきたいと考える。

1. 地域貢献活動への問い直し

令和2年の2月から3月にかけて、臨時休校措置の発出および4月16日には、日本全国に緊急事態宣言が発出され、人と人が集うこと、交流することは、制限されるご時世になり、「不要不急の外出禁止」「ソーシャルディスタンスの確保」「3密回避」が叫ばれた。人と人との交流の場である「まちの保健室」は、安全かリスクか…と問われれば、リスクでしかないという見方も否めなかった。厳重な

感染管理が求められる情勢において、「まちの保健室」は、令和2年3月から、一時、開催を見合わせる事となり、例年、年度末に開催されていた「まめんなかえミーティング」も中止を余儀なくされた。大学において教職員も学生も、対面授業継続、オンライン授業成立の可否、看護学実習受け入れの可否、皆が健康で社会生活を継続していけるのかなど、渦巻く不安の中にあった。

しかし、新型コロナ感染第1期とされるこの時期、医療職・看護職として第1線で感染管理を担っている看護の仲間の姿、特別警戒地域の只中にある看護の仲間の現状を知るにつけ、「看護職として何ができるのか」を考えるなかで筆者（古都）の脳内には1つの疑問符がリピートするようになった。それは、『『まちの保健室』をはじめとする地域貢献活動は不要不急なものだったのか』の問いである。不要不急以外は回避する必要があるなかで、私たちが生活への不安を抱えているように、あるいは、それ以上に住民は感染への不安、外に出ることへの不安および出られない不安など、さまざまな思いを抱えながら暮らしておられるに違いないと思えた。「看護職として、看護学の専門性を教授する看護大学として『今、できることは何なのか』」を探求する必要がある。いつもどんなときでも地域に寄り添い、人々の健康ニーズに対応する真の地域貢献活動を手探りで取り組む必要性に考えが及んだ。特筆すべきは、委員会メンバーが、極めて前向きに弾力的に合意形成し、取り組み始めた起動力の素晴らしさであった。たとえ、匍匐前進でも歩みを重ねることこそ、地域密着の本学の姿であると再認識し、「今できる地域貢献活動」は新型コロナ禍の新たなスタートラインに立った。

2. 「今できる地域貢献活動」のプロセス

令和2年度における「今できる地域貢献活動」の状況と取り組み概要は、表のとおりである（表1）。

以下、時間軸に沿って第1フェーズから第3フェーズにおける取り組みのプロセスを述べる。また、第1フェーズの活動詳細は、地域貢献委員会の臨時ワーキングとして立ち上げた班において、リーダー役割をアグレッシブに担った3名の委員から具体的な活動報告を紹介する。

表1 令和2年度「今できる地域貢献活動」の状況と取り組み概要

期間	状況	取り組み内容
令和2年3月 令和2年4月	「まちの保健室」開催中止 「今できる地域貢献活動」 開始	第1フェーズ：「今できる地域貢献活動」のスタート マスク作成、お手紙まち保、 教育ボランティアとしてのまめんなかえ師範支援
令和2年6月	「まちの保健室」再開 感染管理体制による「まちの保健室」	第2フェーズ：「まちの保健室」再開における創意工夫 完全予約制導入、4年生によるミニ講話 参加者へのミニパンフレット、手作りマスク配布・感染管理のオリエンテーション、ボランティアとの協働
令和2年8月	「まちの保健室」一時中止 県内発症に伴い、急遽中止	第3フェーズ：「まちの保健室」バリエーションの模索 「お電話まち保」の実施
令和2年9月 ～12月	「まちの保健室」再開 「今だからできる地域貢献活動」Version2	弾力的な企画の工夫「えんがわまち保」の実施（11月） 「子育てオンラインまち保」の実施（12月）
令和3年1月	with コロナの「まちの保健室」 継続	「まちの保健室」企画・運営の考え方を再確認し、 感染管理の安全対策をさらに充実

3. 第1フェーズ：「今できる地域貢献活動」のスタート

1) マスク作成

マスク作成班リーダー 田中 美菜江

令和2年4月下旬から約2か月間、地域貢献委員が中心となり、教職員、学生ボランティア、まめんなかえ師範がマスク作りに取り組んだ。合計417枚のマスクを作り、「まちの保健室」に来られた地域の方や鳥取短期大学附属こども園に無償で届けた。

マスク材料集めと呼びかけ

マスクが品薄になり、材料不足でマスクを作ることも困難な状況であった。マスク材料（布地やゴムひもなど）の寄付を教職員に呼びかけ、学生には休校期間中にマスク作成への協力を依頼した。

多くの地域の方に手作りマスクを届けるために「マスク作成キット」を考案した。マスクは、子ども用と大人用の2種類、立体型、プリーツ型等の複数タイプを制作した。教職員は自宅にある裁縫道具、ミシン、アイロン等を持ち寄り、空いた時間に教室の一角でキット作りを行った。また、1階交流ホールとシングラス寮（学生寮）にミシンなどの道具を置き、作成ブースを設置した。教職員のみならずその家族、まめんなかえ師範、そして学生ボランティアは家庭や大学など多くの場所で制作した。



教職員の作業風景



出来上がったマスク

マスクを届ける喜びから

出来上がったマスクは、「まちの保健室」の利用者に手紙を添えて郵送、鳥取短期大学附属こども園の園児と教職員に直接、届けた。さらに、「まちの保健室」の再開に伴い、利用者にマスクを配布した。

「まちの保健室」の利用者からはお手紙や電話でお礼の声がたくさん寄せられ、こども園からは園児らが嬉しそうにマスクをつけていたとの嬉しい声が届いた。7月には学生ボランティア19名を対象に学生ボランティア表彰式「素敵なボランティア賞」を企画した。学生は、個人または寮やサークル仲間でマスクを作った。学生の作品は、ミシン縫いや手縫い、可愛い作品や渋いデザイン等のさまざまな作品が集まった。この取り組みにより、多くの人の力で地域のたくさんの人に喜んでもらえることを体験した。看護は対象者の思いを大切にチームでかかわる。この気持ちを大切に地域貢献活動を続けていきたい。



マスク作成ブース（交流ホール）

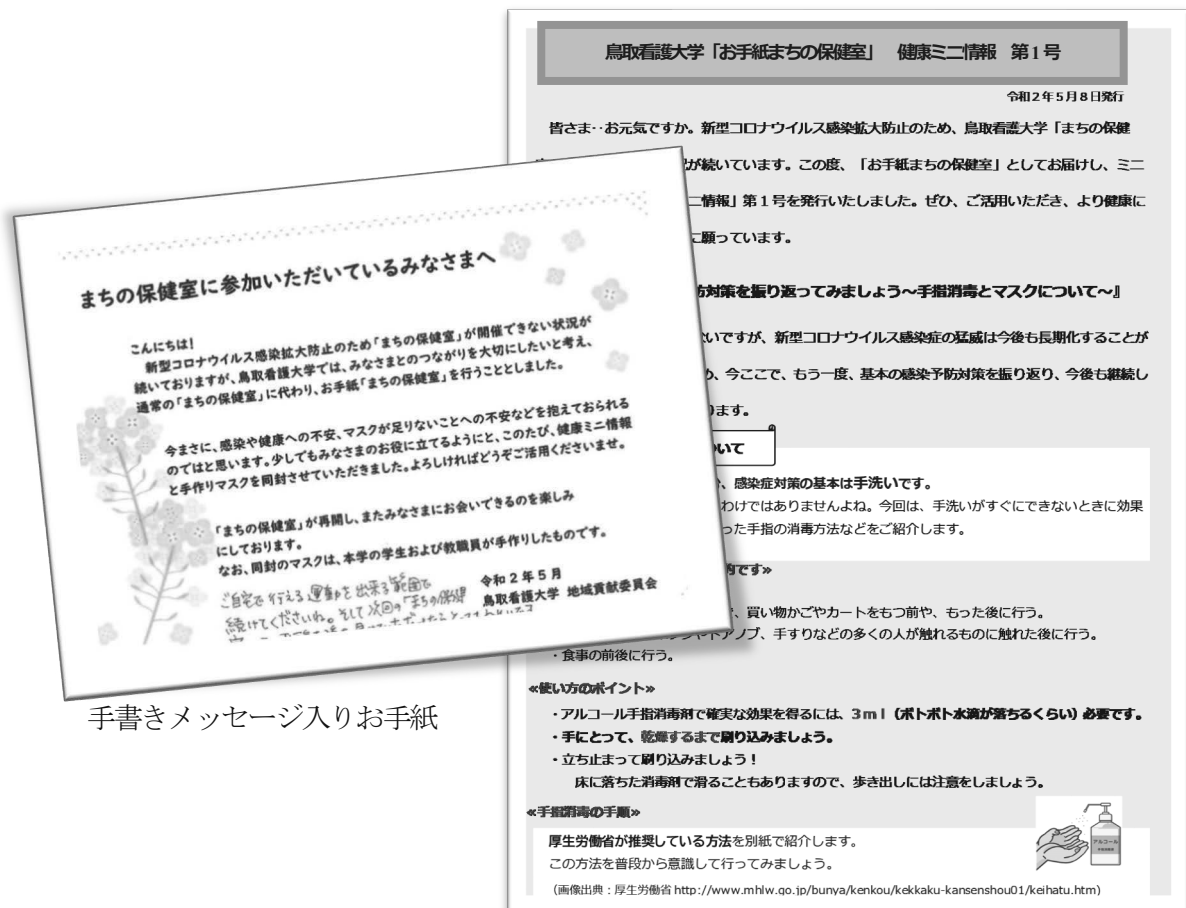


学生ボランティア表彰式

2) お手紙「まちの保健室」

お手紙「まち保」班リーダー 松本 弘美

感染症の流行にともない令和2年4月の拠点型「まちの保健室」の中止が決定し、5月の開催も危ぶまれていたなか、「まちの保健室」に参加して下さる方にメッセージを届けたいと『お手紙「まちの保健室」』がスタートした。メッセージ作成では、人との触れあいを届けたいため、教職員による手書きメッセージを加えて明るさと温かさを重視した。さらに、感染予防へのミニ知識を提供するために健康ミニ情報と称したパンフレットを作成し、正しいマスク着用と手指消毒の方法を盛り込んだ。ここに、手作りマスクを添えて、前年度拠点型「まちの保健室」に参加された66世帯69名の方に郵送した。その後、心のこもった6通のお礼状や3件のお礼の電話もいただき、うれしい気持ちでいっぱいになった。その返事の中には、感染症に対する切実な不安が書かれており、お手紙「まちの保健室」の意義を改めて感じるとともに、行動をおこすことで地域の方に寄り添うことだけでなく、地域の方から元気をいただく相互関係を感じることができた。感染症の流行に翻弄されることなく、今できる「まちの保健室」としての、お手紙のちからは今後も生かしていきたい。



手書きメッセージ入りお手紙

健康ミニ情報

3) 教育ボランティア支援

教育ボランティア支援班リーダー 福永 まゆみ

まめんなかえ師範による教育ボランティア活動の背景

鳥取看護大学では、現在まで、128名のまめんなかえ師範を養成しているが、地域・教育ボランティアに積極的に参加している人はその内の4分の1に留まっている。まめんなかえ師範にとっては、地域や看護大学で開催する「まちの保健室」が、健康づくりリーダーとしての力を発揮する場であると同時に、ともに運営に携わる学生と交流しながら教育的に関わることは、「学習意欲の刺激」の1つでもある。昨年来、世界中で新型コロナウイルスの流行をうけ、本大学が通年にわたり展開していた「まちの保健室」の実施は中止となることも多く、開催しても人数を大幅に縮小せざるを得ず、まめんなかえ師範の活動の機会も激減した。学生においても、看護学教育の中で重要な教育的意義を有する臨地実習にまでも影響が及んだ。地域貢献委員会では、「今できる地域貢献活動」の1つとして、まめんなかえ師範による教育ボランティアの活動を、1年生の生活健康論実習、2年生の基盤看護学実習へ活かすことを試みた。その結果、双方に相乗的な学びの効果を得ることができた。

生活健康論実習のインタビューの実際 (教育ボランティア 11名)

生活健康論実習では、学生が、地域に暮らす人びとの生活行動の背景にある健康に対する意識を考察し、自らの生活観や健康観を深めることを目的としてインタビューを行っている。インタビューは例年、地域の自治公民館へ出かけ、住民の活動や、まち歩きの中で実施される。今年は住民の活動も制限されており、感染管理を行った上で、7/4(土)・7/11(土)の2日間、学内でインタビューの場を設けて実施した。11名の教育ボランティアは2日に分散し、1グループに対して1名がインタビューを受ける。20分のインタビューの中では、食事や運動などの健康を維持するための方法や、健康へのこだわり、自身や、家族の病気や介護、人との関わり方など、様々な考えが語られた。学生は、これらの語りから、自分とは違う生活観や健康観、価値観の存在を意識し、それを理解しようとするとともに、学生自身の生活観や健康観を振り返り深める事ができた。教育ボランティアは、インタビューとして自己の健康観や生活観を語り、「あらためて自分を見つめ直す機会になった」、「世代の違う若い学生と話すことが楽しかった」、「聞いてもらえてよかった。今後も役に立ちたい」などの反応があった。

基盤看護学実習の学内実習模擬患者の実際 (教育ボランティア 5名)

初めての臨床実習の機会であった2年生のうち、22名(3施設7病棟)が、実習を予定していた病院での実習が叶わず学内での実習となった。臨地実習と同様に、白衣を着用し「行動計画」を教員に報告してから実習を開始した。受持ち患者紙上4事例(糖尿病教育入院、腎不全保存期、誤嚥性肺炎、変形性膝関節症術後)をグループメンバーで個別に担当した。1週目は対象理解の思考過程を整理しながら実習室での学生相互による実践、看護計画立案を実施した。変化する患者に対してリアリティをもってイメージできるよう3日目から随時追加情報を提示し、看護展開の一助とした。学生は情報収集しながら患者の状態の変化をとらえ、変化に応じた看護計画立案が可能となった。2週目火曜日に教育ボランティアによる模擬患者に計画の一部を実施し、患者のリアルな反応を得た。水曜日には、前日の実践をリフレクションし、修正を加えて再度模擬患者へ看護計画を実践した。看護実践の内容としては、バイタルサイン測定、シーツ交換・環境整備、足浴、洗髪、車椅子での散歩などであった。学生は、緊張しながらも事前にカルテから得た情報をもとに、患者とコミュニケーションをとりながら、習得した看護の技術を使って看護を展開していった。リアルな患者の反応に戸惑い、自己の技術の未熟さを痛感しながらも、患者の反応からその意味を考察し、次の日にはより患者にあった看護ケアとなるように工夫し、観察の視野を広げることができており、教員も学外での実習と同様の手応えを感じた。模擬患者として学内実習に協力して下さった教育ボランティアからは、学生の技術は未

熟だが、1日目よりも2日目の看護が進化しており、一生懸命患者のために取り組む姿に感銘を受けたことや、小さな気づきを看護ケアに取り入れてつなげていることへの驚きも聞かれた。また、自らが、模擬患者となり、学生の学びの助けになれたことへの喜びや、自身の学びにつながったとの言葉が聞かれた。

学内実習の一場面



洗髪の実施

緊張したけれど、模擬患者さんから「指先から愛情が伝わったよ」と言っていた😊

学内実習の一場面



患者さんを囲んで
リフレクション...

みんな思いが言えているね！と叱咤激励andお褒めの言葉...
「患者さんは日々変化する」と教えられた😊

今後の教育ボランティアの活動可能性と課題

高齢者が年齢や性別にとらわれることなく、さまざまな世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍できるように、ボランティア活動をはじめとした高齢者の社会参加活動を促進する動きが全国的に見られている。学生は、看護技術や、コミュニケーションなど、様々な学習場面において看護師役、患者役の双方を演じながら自己の課題に気づく。しかし、友人が患者となる状況から、リアリティに欠け、患者の不自由さや、緊張感が伝わらない。根拠と手順は講義で理解できるが、援助を受ける側の気持ちを推し量って実施するような患者への配慮はイメージがしにくい。一方、地域住民が模擬患者として演習に参加することで、学生を肯定的にとらえる機会となることや、自身の健康を考える機会につながるという研究報告もある。これらのことから、看護学演習における模擬患者としてのまめんなかえ師範の活躍を期待するとともに、地域の健康づくりリーダーであるまめんなかえ師範のキャリアアップ、リーダーの充実に向けた支援を検討していきたいと考えている。

4. 「今できる地域貢献活動」の取り組み状況

以上、3名のリーダーから、第1フェーズ:「今できる地域貢献活動」のスタートにおけるマスク作成、お手紙まち保、教育ボランティア支援の3つの活動について、具体的な活動を紹介した。

令和2年度「今できる地域貢献活動」における各フェーズの活動過程について、以下に紹介する。

1) 第1フェーズ:「今できる地域貢献活動」のスタート —手探りでも動いていく—

新型コロナ禍の環境において、地域住民の健康づくりの一環として、企画を創出し、当然ながら、適宜、状況をふまえて危機管理委員会の意見を確認しながら行うものとした。令和2年4月から5月の取り組みは、①全学ボランティア力を総動員したマスクの作成・配布、②感染管理および活力につながる「お手紙まち保」の郵送、③教育ボランティア支援の3点である。このフェーズにおけるテーマは、「手探りでも動いていく」であった。

全国的にサージカルマスクが手に入らないなかで、限られた物資は医療に回したいが、マスクを手でできない住民もおられると想定された。「まちの保健室」の中断から、「対面でなくても届けられる地域貢献」に手探りで取り組んだ過程を振り返ると、真の地域貢献ができる大学であるという環境への「確信」と「感謝」である。前述したようにマスク作成から動き出した第1フェーズは、手探りながら抜群の起動力によるダイナミックな日々であった。品薄になっていたミシンの調達にすぐに走った教員、マスク布の募集に端切れを集めに走った教員、臨時のマスク工房に集った多く

の教職員、マスク作成に取り組んでくださった短大生、学部生、お手紙まち保を受け取った住民からの思いあふれるご返信葉書、教育ボランティアとしてのまめんなかえ師範の活躍などが思い浮かぶ。持ち寄られた未使用の現役看護師時代の白いストッキングは、マスクの紐として活躍した。「今できる地域貢献活動」は、地域色に染まった本学らしい1ページであった。

2) 第2フェーズ:「まちの保健室」再開における創意工夫 —リスクを読みながら取り組む—

令和2年6月、県内の発症状況をふまえて、「まちの保健室」は、学内で開催される拠点型「まちの保健室」を皮切りに再開となった。「まちの保健室」に集う住民への感染管理教育の契機にすることを視野に企画を検討した。このフェーズのテーマは、「リスクを読みながら取り組む」であった。

鳥取県内で発症がはじめて確認されたのは同年4月10日、その後4月に計3例の発症、5月、6月と発症はなかった。しかし、全国的には若者の感染リスクが取り沙汰され、大学生高校生などの学生の発症例も見られていた。「まちの保健室」は安全な企画運営が第一義であり、地域貢献委員会として「まちの保健室」再開時の考え方を明記して取り組むこととした。考え方は、①感染対策を厳重に行い「まちの保健室」が感染の媒介場所にならないようにする、②参加者が安心や活気を感じられるような居場所とし、健康不安の軽減に努めるを掲げた。変更した内容は、①完全予約制20名までとして事前受付開始、②来場者へのミニパンフレット配布と来場時の感染管理オリエンテーション、③まめんなかえ師範への感染管理事項の確認とスタッフ人数を減らした少数配置などである。当然ながら、手洗い、マスク着用は徹底した。また、ミニ講話の時間の短縮化、飲料サービスはペットボトル配布に切り替えるなど、リスクを読みながら、一堂に会する人数を絞り、3密回避とソーシャルディスタンス確保に留意しながら、かつ和める場にすることを念頭に再開した。

「まちの保健室」は、健康チェックや健康相談の場であるのみならず、交流の場であるということ大切にしている。本来であれば、お茶を飲んでくつろぎ、健康情報を交換したり、四方山話を通じて、リフレッシュにつながる活発なコミュニケーションを期待したいところである。その目的が叶わない不自由さはあったが、マスク越しの笑顔にふれ、ミニ講話や健康指導に熱心に耳を傾けられる姿に救われながら、運営していった。また、人数を絞り、オリエンテーションを兼ねた挨拶からスタートする「まちの保健室」は来場者お一人お一人を大切にする柔らかな空気を形成した。

この時期、嬉しかったことがある。「まちの保健室」にひきびさに来場された住民の方から、「お手紙ありがとう」、「また来てよかった」と言われ、お手紙まち保で郵送したマスクを装着して来場された方など、住民の方の反応が得られたことである。

令和2年6月、7月と「まちの保健室」は再開したが、年度内に予定されていた「まちの保健室」のなかには、中止決定に至ったケースもみられた。また、「秋までの動きを見て決定したい」など、予定が定まらず、「先が見えない不安」のなかでの再スタートであった。科目担当教員との連携により4年生のミニ講話を実施し、学生たちの奮闘が光ったが、看護学実習との兼ね合いを考えると学生のボランティア参加は慎重に見合わせるが多々あった。世の中では大学生のクラスターなども報道されており、「大学生は危ない」という一般化された通念が世の中になかったわけではない。その背景からも、「まちの保健室」に来ていただけることは、喜びであり、「まちの保健室」への信頼であると思えた。「安心安全のまちの保健室」への切なる願いと心構えで運営していった。

3) 第3フェーズ:「まちの保健室」バリエーションの模索 —弾力的な思考で試行する—

(1) バリエーションあれこれの模索

令和2年7月から8月、鳥取県内における発症が続き、近隣町村からも感染が確認された。危機管理委員会における検討結果からも「まちの保健室」は再び、開催を断念した。新型コロナウイルスの鳥取県内での発症がみられるなかで、感染拡大を予防するために「まちの保健室」の開催は中止せざるを得なかった。公民館の「まちの保健室」として開催を予定していた地区には、直前のキャンセルでご迷惑をおかけしたことは心苦しい限りであった。続出する県内発症に「まち保クラス

ター」は回避したいという思いから断念せざるを得ず、「勇気をもって後退する」という思いであった。

しかし、後退し続けるわけにはいかなかった。このフェーズのテーマは、「弾力的な思考で試行する」であった。住民の不安に寄り添い、健康課題への支援に向けて「今できる地域貢献活動 (Version2)」として、「まちの保健室」をアレンジし、感染管理の視点をふまえたバリエーションを探求し、弾力的に可能性を拓いていくこととした。「お手紙まち保」、「お電話まち保」、「オンラインまち保」、「おひとり様まち保」などを素案とした。すでに第1フェーズで経験のある「お手紙まち保」は、対面がどうしても叶わないときに用いることとした。「オンラインまち保」は、委員会内でも意見が分かれるところであった。感染リスクを考慮すると第一優先ではあるが、高齢の利用者が多い「まちの保健室」のオンライン環境整備は容易ではなく、入念な準備が求められるであろうと容易に推測できた。高齢者における ICT の技術的な課題を侮れないという意見が多かった。「お電話まち保」については、当初、顔の見えないなかでの健康相談はリスクがあるのではないかという意見があがった。

最初に取り組んだのは、「お電話まち保」であった。顔の見えない電話でのやりとりにリスクはあるものの、対象者を限定して試行として起動した。8月に急遽中止となった「まちの保健室」を予約していた住民8名にお詫びの機会を兼ねて、地域貢献委員3名で「お電話まち保」を実施した。実際に測定もできず、対面はかなわれないが、近況を話してくださり、健康状況を確認する機会となった。何より突然の電話訪問にも快くご対応いただいたうえに、「お電話までいただいてありがとう」の言葉に、電話越しの笑顔が見え、再び「地域貢献魂」は元気倍増し、可能性を確信した。

(2) 「えんがわまちの保健室」、「子育てオンラインまちの保健室」の実施

その後、新型コロナの収束をみない状況をふまえて、「えんがわまち保」の企画を検討した。令和2年度、まめんなかえ師範のボランティア参加人数を絞っている状況であり、一部のまめんなかえ師範の方に教育支援ボランティア参加の機会があったものの、活動機会は狭まっていた。まめんなかえ師範は、地域の健康づくりに寄与される存在であり、地区基盤は強固である。その状況をふまえて、地区基盤の力を借りた活動に意義があると勘案した。住民の中には、不特定多数の人が集まる場に参加すること自体に不安を抱えている状況も伺えた。どこかの「えんがわ」に集うようにご近所同士で気楽に集うような「えんがわまち保」を地区のまめんなかえ師範との連携により、企画した。安心して顔の見える関係性の中で生活の不安を口にしたり、健康課題にふれる場としたいと考えた。教員も少人数で、健康データの1つに着眼して、たとえば、血圧計のみを持参するなどの企画である。まめんなかえ師範の主導で地区ニーズに細やかに対応するスモールタイプの「まちの保健室」として「えんがわまち保」の開催を企画した。

「えんがわまち保」は、令和2年11月に倉吉市内の1地区で熱意あふれる「まめんなかえ師範」の企画により、実施に至った。事前に「まめんなかえ師範」2名と委員会メンバーのミーティングをもった。「えんがわまち保」は5名の参加者が集まり、パルスオキシメーターで酸素飽和度を測定し、生活や健康の話題を語る場とし、感染管理対策としてマスク着用および環境に配慮し、実施した。「美容室に行ってきた」と数年ぶりに参加された方もおられた。地区のネットワークで参加を可能にした参加者もみられ、地区に根ざした活動として「まめんなかえ師範」の力を確信した。今後、まめんなかえ師範主体の地区リレー方式で、バトンを渡し、継続を目指す方向性とした。

また、子育て中のお母さんを対象とした「子育てオンラインまち保」を12月に実施した。オンライン環境に限界があるとされた「オンラインまち保」であったが、SNS を駆使している世代である子育て中のお母さんには有用かつ簡便である。参加者は2名であったが、小児看護学教員が実施するベビーマッサージを示し、オンライン上で丁寧にかかわることができ、参加者からも好評であった。「子育てまち保」は、オンラインでの開催に十分な手応えを得たことから、今後、充実した広報活動により、参加者を募り、すこやかな子育て支援に向けた活動への可能性と方向性を得た。

5. with コロナの「今できる地域貢献活動」

令和2年度に地域貢献委員会のメンバーと取り組んだ活動について報告した。with コロナの活動をどのように考えるのか、その価値観は一樣ではないことをふまえて企画・運営にあたる必要性を実感している。with コロナの「今できる地域貢献活動」として、令和3年1月に委員会で合議した看護大学の開催する「まちの保健室」の企画・運営の考え方として、以下の2点を明示した。

- ①「どのようにすれば、より安全に運営できるのかを常に検討し、状況をふまえて対応する」
- ②「感染管理対策を、専門職の視点をもって十分に行いながら、少人数に対応し、希望された方に丁寧にかかわる」

「まちの保健室」について、実施しないほうが感染リスクが低いという見解があるのは、十分承知している。しかし、with コロナの現状で創意工夫のもとに実施した中で新たな視野も広がったと思えている。健康ニーズは多様であり、そのニーズに丁寧に対応できる可能性を有する「まちの保健室」でありたい。充実の感染管理を目指して、サージカルマスクとフェイスシールドの併用および感染管理教育の場として充実を図っており、住民にとって感染管理の実践の場として活かせるように精練していきたい。また、看護学実習への制約から、令和2年度の学生参加は限られた回数にとどまったが、ボランティアに手を挙げる学生の存在に頼もしさを感じている。

日々、新型コロナウイルス感染症の患者と対面し、命と生活をかけて看護している看護職があるからこそ、日本の医療の現状を守っている。地域包括ケアの考え方の1つに「地域づくりの成否を左右する偶然を呼び込む」⁵⁾と述べられている。地域貢献活動において、新型コロナウイルス感染におけるwith コロナを「偶然を呼び込む」という前向きな考え方で受けとめたい。「地域とともにある大学」、看護学を教授する学術機関が開催する「まちの保健室」について、with コロナの「今できる地域貢献活動」を弾力的に勘案しながら、新たな活動のバリエーションを模索し、取り組む所存である。

おわりに

筆者（古都）は、医療安全学を担当してきた。本学では2年次科目「リスクマネジメント論」を担当している。学生と医療事故やインシデントの事例を学ぶと、「看護師になるのが怖くなった」という意見が必ず聴かれる。おびやかすための学びではなく、その意見には精一杯、真摯に向き合うようにしている。自己のインシデント経験を語り、どのように乗り越えてきたのか経験から語ったり、リスク感性として優れていると肯定的なフィードバックをしながら、学生たちに伝えるエピソードがある。前任地北の街での「雪道の横断歩道の歩き方」である。真冬には横断歩道が鉄板のようにツルツルになり、歩くのはリスクを伴う。しかし、横断歩道の手前で、いつも立ちどまっているわけにはいかない。どうしたら、安全に渡れるのかについて、歩き方、靴の選び方などを考え、経験や他者の意見を最大限取り込みながら総合的に勘案して「勇気を持って歩く」のである。もちろん、判断如何では「勇気を持って後退する」も選択肢にはある。怖さを感じるのは悪くはなく、そのリスク感性をどのようにリスク認知に変えて実行するのが重要であると考ええる。

with コロナの「今できる地域貢献活動」は、冬の横断歩道や臨床場面にも共通性があるといえる。ナースステーションの真ん中でヘルメットをかぶって居座っていれば、インシデントは起きないかもしれないが、医療の質も看護の質も向上しない。地域貢献活動の質向上に向けて、地域貢献委員会のメンバーの力を結集し、関係する皆様のご理解・ご協力をいただきながら取り組み続けたい。さらに、看護学教育の場としての「まちの保健室」のあり方を探求していきたい。

末筆ではあるが、令和2年度の活動において、多くの方々との連携・協働が活動の源であり、勇気の源であったからこそその過程であったと振り返る。住民の皆様、まめんなかえ師範の皆様、学生、教職員、グローバルセンターの皆様、見守り、支えていただいたすべての皆様、そして、抜群の起動力とともに歩んだ地域貢献委員の皆様にご心より感謝の意を伝えたい。ありがとうございました。

《参考文献》

- 1) 藤井麻帆・田中響・美船智代・永見純子・近田敬子：CCRCにおける大学の役割と構築—まちの保健室を用いた連携・協働のあり方、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要、第77号、pp49-55、2018.
- 2) 田中美菜江・稲田千明・田中響：T自治公民館における「まちの保健室」実践報告、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要、第80号、pp45-50、2020.
- 3) 中川康江・近田敬子・田中響・土居裕美子：地域の健康づくりリーダー育成事業における「ラダー式研修制度」の効果と課題、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要、第80号、pp21-26、2020.
- 4) 中川康江・田中響・土居裕美子・近田敬子：地域の健康づくりリーダー養成による大学・地域連携強化の取り組み、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要、第76号、pp57-60、2018.
- 5) 田中滋監修：地域包括ケアサクセスガイド、pp86-87、MCメディカ出版、2020.
- 6) 阿部 オリエ・本田 多美枝・小手川 良江・中平 紗貴子：看護学実習前演習に地域住民が模擬患者（Simulated Patient：SP）として参加することの意義に関する研究（第2報）、日本赤十字九州国際看護大学紀要、第17巻、pp9-20、2018.
- 7) 松本弘美、藤井麻帆、福永まゆみ：高齢者の社会参加の要因となる交流に関する文献レビュー、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要、第81号、pp21-29、2020.